

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 永井荷風『濃東綺譚（ぼくとうきだん）』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 45 回のツイキャス読書会の課題図書は、永井荷風『濃東綺譚（ぼくとうきだん）』です。

[青空文庫版はこちら](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 遷東綺譚 感想文

私は過剰な字幕と嘘笑いばかりのテレビや、ネット記事やそれに対する書き込みを見るのに嫌気がさして極力それらを見ないようにしています。ラジオや蓄音機の音から逃れたいという大江の気持ちが理解できます。

この作品を読んでいて一番印象に残っているのは、大江の事を筆誅する操觚の士に対し

「正義の宮殿にも往々にして鳥や鼠の糞が落ちておりと同じく、悪徳の谷底には美しい人情の花と香しい涙の果実が却って沢山に摘み集められる」

とあったところです。泥中の蓮、という諺がありますが、お雪の東京に染まっていない様子が当てはまるかなと思いました。昭和の初めはまだお座敷小唄に出てくるような世界があったのですね。

偽善か露悪かで言えば作品中に出てきた文藝春秋は偽善で、大江は露悪になるかなと思いました。

明治、大正、昭和、関東大震災前と後、玉の井稲荷界限の青線地帯と銀座の表通り。時代と共に服装や話し言葉も変わり、そして荷風や大江、失踪の種田が歩いた街々は戦争により焼け野原になってしまった。

本筋から逸れますが GHQ マッカーサーははじめ日本の民主化に力を入れようとしていたが、戦前のインフラ整備や関東大震災前の復興にアメリカが多額の投資をしていたので、それを回収する為、東西冷戦が深刻化して日本を反共の砦にする為、占領政策を経済政策に転換させる進言をウォール街出身のドレイパー陸軍次官がしたそうです。そして朝鮮戦争が勃発し、日本の戦後復興は急速に進んだ。

ああ、ここでもまたアメリカと金の話に繋がるのか、と少しうんざりしました。

それでも何処かに残っているかも知れない昔ながらの風情を探しに、いつか浅草やスカイツリーのあたりをぶらぶらしたいと思いました。

(おわり)

エヴァタさんのブログです。 『弱視目線』 <https://blogs.yahoo.co.jp/childrenkaneyou>

## 遷東綺譚 永井荷風 感想文

ふらりふらり遷東の陋巷を彷徨い、袖振り見知った窓の女の処へ足繁く通う。目的は小説のための観察。本名も素性も知らないまま、夏の始まりから秋口までの泡沫の恋。という話の内容はともかくも、読後は何故だか後味が悪い。

私娼窟が舞台だからとか、主人公が身勝手だからとかの理由ではない。女を買う文化を否定する気もないし、極端に潔癖症という訳でもない。消えゆく江戸情緒を懐古的に描き、季節の移ろいと心情の掛け合わせは、風景として美しいし、文章の耽美さや風雅な表現、文体のリズムはととても心地よい。

ただ、読後のこのザラつきは何なのか。一定して観察している書き手へ対する不信感のようなもの。どうやら私は荷風先生が苦手なようです。

権威への反骨と人嫌いから起こる世の中への諦念。バイヤスのかかった裏町への偏愛。綴られた言葉が情緒的なのはいいけれど、ねちねちと言ひ訳がましく聞こえる「わたくし」の行動が作家と重なるのは仕方がない。

「なんでもないことが咎められる世の中」だったと安岡章太郎の「悪い仲間」の一文を聞いた。

大きな戦争が目前に迫る鬱屈した時代のせいで、東京の世情は暗く重苦しい。世間とも権威とも背を向ける覚悟があり、せめて作家として自由でありたいと、その身を夏の夜の迷宮へ漂わせている。

ただ、その憤りと自虐の裏に誇り高き自尊心が見え、その部分が飲み込めなかった。どこか誠実さに欠け、人として対峙したとき、間に溝があるような、向こう勝手な冷淡さを感じてしまう。

「遷東綺譚」。今の私には、三文役者が自作自演で悦に入っているようにしか見えなかったのだけれど、これが昭和 11 年の世情のせいだとしたら、なんでもないことを自由に感じられる現在の東京もいつまで続くかわからない。そろそろ荷風先生のように冷淡でも人との距離を置きながら生き抜く覚悟が必要なのかもしれない。それはあまりに寂しい。

(おわり)

## 『濃東綺譚』感想文

小説の中に小説があって、さらに「濃東綺譚」を書き終えた作者の永井荷風の気持ちも入っていて少し混乱しましたが不思議な感じがして読んでいて面白かったです。

私は、匡と雪子とのやりとりがとくに印象に残りました。

あと、情景も多く書かれていて想像しながら読むのも楽しかったです。

とくに雨が突然降ってくる場面は、人々のあわただしい様子が伝わってきて好きな場面です。

雪子は、雨を口実に匡に目をつけたのだとしたらたくましいなと思いました。

匡は、雪子に対して今以上の関係は望んでなくて、どうやって去ろうかと考えてるのはいい加減な男だなと思いました。最初の所で女物の長襦袢を持っていた事で巡査に怪しまれたりして、過去にも何か女性にまつわる良くない事があったからなのかなと思いました。

雪子に対して、魅力は感じていたと思うし好きだったと思うけれど今みたいに、都合の良いときだけ会うからいいけど、一緒になると思いもよらない困難な事が出たり、お互いが憎しみあうほどの関係になるかもしれないという不安が無責任な感じにさせたのかなと思いました。

それに、雪子も、前に一ヶ月も長く居た人がいたらしいし、そういう突然の別れもどこかで覚悟していたのかもしれない。

今までも一人でしっかり生きてきて、これからも雪子ならしっかり生きていけそうだから、男の人にも雪子なら大丈夫！ って思われるのかもしれないなと思いました。

(おわり)

(雪国の駒子の事を思い出しました。火鉢の中をいつも綺麗にしている所とか…)

## 永井荷風「湊東綺譚」感想文

私は今まで読んだ小説と違う不思議な感想を初めもちました。この話は事実？創作？ 小説か随筆か自伝か？

主人公が作家であること、小説をうまく書くための手法が書いてあること、話が二つ展開していくこと、詩や句まで出て来る事に混乱してしまったのです。

でも後で、題名のきだんのきが、糸へんつきの方と分かって意味が分かり、作者の構成の巧みに驚きました。

私は、主人公の「わたし」は随分身勝手な人だと思います。自分の年齢や仕事、前の失敗や若い雪子のために理由に去ったからです。会いたい気持ちや寂しい気持ちが書かれてはいますが、結局見舞いにも行かず、彼女は死なないと決めつけ、寒くなってきて静かになったら、外へ行く必要もなくなったと書かれているからです。私は雪子が可哀想だと思いました。しかし、話自体は悲しい話に思えませんでした。

それは、雪子に関する記述が少ないことと、話の冒頭に書かれている「小説は人物の性格より人物の生活が展開する場所と背景の描写（気候や季節に注意）が大事だ」の手法によるものだと思います。

確かに背景描写は見事で、二人の繋がり初めと終わりを雷で、その変化を暑さと寒さ、雪子の髪型、ブドウやイチジクや葉鶏頭で表しています。

また、私が共感したのは「わたし」が大震災前の街の風情や生活をこよなく愛していることです。It 化が急速に進み付いていけない私もこの気持ちが分かります。

それから、この小説には読んでいて面白い箇所がたくさんありました。

小説の手法としての説明である「取材中は相手の話し言葉に自分も合わせて言葉を使う」「話の舞台になる場所の取材の時は住人の服装に合わせる」のところ。一番可笑しかったのは、「わたし」が雪子に 30 円渡しての帰り道の描写のところ。バス停の名前が「地藏坂」、板塀と地藏様の間で身を縮めて風を耐えたの文に、悲しい場面のはずが笑ってしまいました。

他にもすみ子の住むアパートの名が「吾妻アパート」、短い恋の相手がすぐに溶けて消える雪の雪子、おそらく「わたし」を表す葉鶏頭の花言葉が「情愛、絶望」なのも話を面白くするための作者の策略だと思いました。

葉鶏頭はさらに、花の意味が「ヤコブがヨセフにあげた上着」という意味らしいので、これは「わたし」が雪子にあげた着物代にかけているのかなとも思いました。

まだたくさんからくりが隠れていそうです。

この小説は悲しい情愛の話ではなく、永井荷風特有の、からくり話だと思います。

(おわり)

## 『濯東綺譚』 読書感想文

今までの経験から《彼女達は一たび其境遇を替え、其身を卑しいものではないと思うようになれば、一変して教う可からざる懶婦となるか、然らざれば制御しがたい悍婦になってしまう》と考え、お雪も所詮そうなんじゃないかと思い、主人公のわたくしは、お雪と会わないことにします。

《わたくしは散歩したいにも其処がない。尋ねたいと思う人は皆先に死んでしまった。風流絃歌の巷も今では音楽家と舞踊家との名を争う処で、年寄が茶を啜ってむかしを語る処ではない。わたくしは図らずも此のラビラントの一隅に於いて浮世半日の閑を偷む事を知った。そのつもりで邪魔でもあろうけれど折々遊びに来る時は快く上げてくれと、晩蒔ながら、わかるように説明したい》

このわたくしの吐露を読んで、何とも言えない心持ちになりました。

《其顔立と全身の皮膚の綺麗なことは、東京もしくは東京近在の女でない事を証明している》

証明してるのかな？ 所々、首をかしげる部分がありました。

小説「失踪」の《唯今日まで二十年の間家族のために一生を犠牲にしてしまった事が いかにもにがにがしく、腹が立ってならないのであった。》という主人公の心情は、辛辣極まりなく、小説の中の小説の一節なのに、読んでいてギクツとしてしまいました。

《わたくしには親しかった彼の人々は一人一人相ついで逝ってしまった。わたくしもまた彼の人々と同じように、その後を追うべき時の既に甚しくおそくない事を知っている。》淡い恋から遠くない死の予感までの間に沢山の嘆きが、私にはきこえましたが、なんだかんだと云っても、批判するだけで、脱け出せない自分(作者自身)を嘆いてるのかとも思い、もしかしたら自虐小説な面もあるのかとも思いました。もしそうなら、永井荷風先生はすごく正直な方なんだなあと思いました。

(おわり)

## 『湊東綺譚 読后感』

果たしてお雪は「わたくし」が見立てたような、快活な女でありまたその境遇をさほど悲しんでもいないのだろうか？

お雪と作中の「わたくし」は、名前も住所も知らない仲である。しかしお雪と「わたくし」それぞれにとってそのことの意味は異なる。

「わたくし」にとってお雪は、すでに世間から見捨てられた一老作家に最終作の原稿を完成させた原動力ではあったが、それ以上の価値を認めなくても誰からも咎められる事はない。なぜならお雪は娼婦だからだ。「わたくし」は、単にお雪の生活空間を知り得ること以上の積極的関与を求めている。つまり、お雪と「わたくし」は、最初から対等な関係ではない。そのことをお雪は分かっていたから自らの心根を吐露しなかったのだと思う。ただ一度“借金が返せたら旦那になって欲しい”とは言ってみたものの、現実味に欠ける事はお雪には百も承知だったのではないか。

それよりもむしろ以下の抜粋部分の方がお雪の分析としてリアルだ。

『それはお雪の性質の如何に係わらず、窓の外の人通りと、窓の内のお雪との間には、互に融和すべき一縷の糸の繋がれていることである』

「わたくし」から見てお雪は、自分たらしめるものを持っていない、ただ外界に溶け込んでいる透明人間のよう映るのだ。私にはこれが二人の関係の本質を顕わしていると思う。自己を失っているお雪と、その女の身体と真情を喰いつくして原稿の糧にする男。

冒頭の疑問に対する私の回答だが、お雪は快活な女でもないし、その境遇をさほど悲しんでいないわけでもないように思える。どう表現してもどれも当てはまるようで当てはまらない不全感が残ってしまう。それがなぜかと考えると、結局はお雪の自己がない事に辿り着く。吸われてもまたインターバルを置いて次に吸われるのを待つ。むしろ積極的に傘に入り吸われに行く。そんな自己への自覚がない女なのだ。

しかし私はそんなお雪にちっとも珍しい印象はない。なぜなら私自身もその一人だからだ。吸われること振り回されることがむしろ生きがいに転化しているとも言える。時々その自覚が持てるようになったのは読書を通じて気づく瞬間ができたためか。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

## 『 運命の人 』

この小説を読んでいたら、蚊取り線香を焚きたくなかった。当時はなかったであろう桃の香りの蚊取り線香を焚きながら、遷東のお雪の部屋にいるように読み進めた。

大江匡は、夕立が縁で、玉の井の私娼お雪と出会う。溝際の蚊のわくところだが、大江は逃避場所として、もしくは小説を書くために、お雪のもとへ通う。

だが、大江は名前も身分も明かさずに、お雪に対して一線をひく。たぶん、大江自身が鶏群の一鶴と称し、玉の井には似つかわしくない容色と才智をもったお雪に多分に惹かれていたのだろう。しかし、大江は恋に突き進むには老獪になりすぎた。様々な言い訳を自らに言い聞かせ、なんとか自然に別れようとする。

一方のお雪も、偶然なのか(故意なのか)、大江の傘に入るというドラマティックな出会いも手伝い、大江を自宅に導くことに成功する。もちろん、大江に惹かれたからだ。女は案外、恋に関しては無駄な動きはしない。数々の男性に出会う私娼のお雪だが、大江に「借金が返せたら、おかみさんにしてくれ。」と逆プロポーズに踏み切る。たぶん、「一緒にいる人だ」と自らの直感にかけたのだ。でも、大江にはぐらかされる。小説の中には表現されていないが、かなりのショックだったに違いない。若いお雪は、相手が怪しくても好きだからこそ一緒にいたいと思う。大江は好きだからこそ、老齡の自分ではお雪を幸せにできないと身を引く。結婚したら女は変わるからと達観しているようで正直、お雪の情熱や愛憎の煩わしさから逃げたのだ。恋を成就させるには、歳を取り過ぎたのだ。でも、お雪へのこの言葉に、大江のすべての気持ちが詰まっている…「運命の人」。

遊戯のような本気のような恋を、後腐れなくできるのも粋なのだろう。猫は家に付くというが、人間が付くのはやはり人間だ。玉の井が逃避場所だったのではなく、お雪が逃避場所だったのだ。大江の玉の井通いのおかげで、夏から初秋までの季節を私自身も味わうことができた。しかし、正月になったら蚊が出なくなると言いあった二人がそこまで待たずに終わるのは、少し切ない。

あーあ、部屋が蚊取り線香の匂いで充満している。もう少し、お雪の部屋の気分が味わえそうだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。



## 「文科綺譚」

『濃東綺譚』は、昭和 11 年が作品の舞台となっている。その年の 2 月に二・二六事件が起こり、霞が関の参謀本部などが、陸軍皇道派たちによって占拠された。クーデター、鎮圧された。世相が暗くなり、市井の庶民は、世情に憚って本当のことを言わなくなった。翌年には、盧溝橋事件が起こり、日中戦争がはじまる。

今日で言うところの言論の自由とか、思想及び良心の自由などが、どんどん制限される重苦しい雰囲気伝わってくる。

お雪は、民家の窓から顔を出して、道行く人に声をかけ、客をとっている。もとは芸者だったというが、長唄も清元も知らないので実際は、怪しい。溝から沸いてくる蚊のぶんぶん飛んでいる中で、生活しているのである。

今で言えば、歌もダンスも苦手な自称元タレント(なんとか 48)の女の子が、場末街の飲み屋に住み込みで勤務して、何人かのお客と深い関係になりながら、生計を立てているようなものである。

遊学経験もあり大学で教鞭もとっていたとおぼしき作中の老小説家が、そんな女性の生態に興味を持って、着物代として、現在にして 10 万円の小遣いを与えるのである。

そういえば、元文科省の事務次官が、現役時代に新宿歌舞伎町のガールズバーに通っていたという話が新聞にすっぱ抜かれていた。

あくまでも職務の一環として、視察目的でガールズバーを訪れ、馴染みになった女性とはカラオケなどして、生活ぶりをヒアリングして、5000 円程度の小遣いを与えていたのだという。奥さんにも貧困調査であると目的は伝えて、許可を得た上での行動だったと本人は弁明している。下情に通じるためのキャリア官僚の涙ぐましい努力である。

小説内小説にふさわしいネタである。元キャリア官僚が、不祥事で役職を辞す。退職金を手にして、歌舞伎町のガールズバーの女の子と『失踪』。

その小説の結末を書きあぐねる、自称小説家の私が、職務質問にあって、交番でねちねち巡査に問い詰められるオープニング。

やがて突然の夕立。さしたビニール傘に入ってきたのは、さっしー似の女で……。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)